

## 農学系知的財産の活用事例 ～梨新品種の取組み～

○山岸大輔<sup>1</sup>、田村文男<sup>2</sup>、渡辺信義<sup>3</sup>、田邊賢二<sup>2</sup>、佐々木茂雄<sup>1</sup>  
(鳥取大学 産学・地域連携推進機構<sup>1</sup>、鳥取大学 農学部<sup>2</sup>、渡辺造園株式会社<sup>3</sup>)

### はじめに

近年、農学分野の知的財産権の技術移転が活発に行われ、農商工連携による商品化がすすめられている。鳥取大学においても、実用化の成功事例のほとんどが農学系知的財産となっており、地域との結びつきが強いものが多い。本事例は、そのような地域との密接な関係の中で研究開発が進められてきたものである。

鳥取県の代表的な農産物に梨があり、二十世紀梨など全国的にブランド化されている。しかし、生産者の高齢化や病害対策、消費者ニーズの変化など、梨生産を取り巻く情勢は厳しい。このような現状のなかで、農学部園芸学研究室において、課題解決に向けた梨の研究が精力的に進められてきており、これまで梨の新品種が育成され、品種登録された。今回、品種登録された梨品種である「早優利」、「優秋」および「瑞鳥」について、品種の特性および実用化された取組みを紹介する。

### 登録品種の特性（日本梨）

品種登録された梨品種は、いずれも交配作業が不要である自家受粉により果実が得られる。また、早優利に関しては、極早生品種であり他の品種が市場に流通する前に、収穫することが可能である。さらにこれら品種は、梨の重要病害である黒斑病に抵抗性であり、以下のような品種特性をもつ。

早優利：小ぶりだが非常に高濃度。肉質、食感共に良好。

瑞鳥：大玉で優美な外観を持ち、糖、酸のバランスに優れている。

優秋：瑞鳥同様に高品質であり、比べて酸度が高くコクのある味が特徴。

### 実用化の特徴

平成21年3月30日に上記3品種の品種登録出願を行い、県内企業である渡辺造園株式会社より、苗木の販売が行われている。果樹である梨は、接木により栽培され、市場で流通する果実は、1本の苗木から毎年収穫が可能である。従って、技術移転に関してはこの点に注意して対応する必要がある。本事例では、単なる苗木の販売のみでは、品質が保証されないという理由から、苗木販売後のフォローも、当該品種の特徴を十分に把握した高い技術力を有する当企業に許諾するに至った。また、近年品種の流出が問題となっているが、特定の企業からの販売によって、生産者および栽培地が把握することが可能となっている。

### まとめ

本事例では、品種の評価および苗木販売に対する企業の取組みが、迅速な実用化を可能とした。今後も地元産業の活性化が期待される農学系知的財産の技術移転において、今回の取組みおよび技術評価が参考になると考える。